

## ■ 姫路港の位置図(主要箇所)



港湾概要	【港湾区域面積】	7,669ha	【総取扱貨物量】	2,933万8,614t (2021年)	【外貿コンテナ取扱貨物量】	1万3,880TEU (2022年)
	【臨港地区面積】	155ha			【港湾管理者】	兵庫県



先端産業を支える

# 姫路港



姫路港

姫路港は播磨臨海工業地帯の中央に位置する。古くから瀬戸内海航路の要衝として栄え、戦後は工業中心の港湾として発展し、背後地域に立地するわが国の基幹産業の生産活動を支えてきた。交流人口拡大を目指す地域と歩調を合わせた取り組みを進めるとともに、エネルギー政策の転換など社会情勢の変化に応じた港湾づくりが続いている。

## ■ 姫路港の沿革

9世紀前	「思賀麻江(しかまえ)」と称し、遣唐使船も停泊して賑わう
985年	「飾万津(しかまつ)」と改称。播州地方の要港として栄える
1889(明治22)年	飾磨港に改称
1931(昭和6)年	飾磨港を主要港湾に編入
1935(昭和10)年	第2種重要港湾に指定
1951(昭和26)年	飾磨港、広畑港、網干港を統合し、「姫路港」として重要港湾に指定
1959(昭和34)年	関税法に基づき開港
1964(昭和39)年	播磨地区が工業整備特別地域に指定
1967(昭和42)年	特定重要港湾に指定
2011(平成23)年	港湾法改正に伴い、国際拠点港湾に

## 経済発展に寄与

### 平安期以前からの歴史を刻む良港

姫路港は、兵庫県の中央からやや西よりの瀬戸内海に面し、世界文化遺産の姫路城の「城下町」を支える港として発展してきた。港湾区域は東西約18km、

面積約7,669haで、国際拠点港湾に指定されている。播磨臨海工業地帯の中央部に位置し、隣接する重要港湾東播磨港と共にわが国経済の発展に寄与している。

陸域には、西側から苧屋、浜

田、網干(あぼし)、網干沖、吉美、広畑、入船、飾磨(しかま)、須加、中島、妻鹿(めが)、妻鹿日田(めがひだ)、白浜、福泊、的形(まどがた)、大塩の16地区がある。野田川河口に開けた旧飾磨港は古来、「思賀麻江(しかまえ)」



臨港道路が網干沖地区まで延伸される

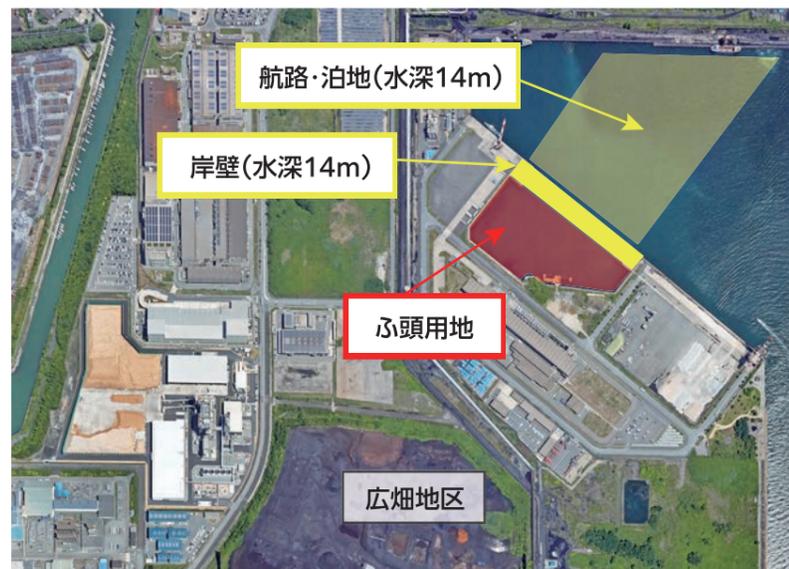
と称され、遣唐使船が停泊した記録が残るほか、わが国最古の歌集、万葉集には、「思賀麻江」の名が出ている。平安期の985年、花山天皇の行幸の折に「飾万津（しかまつ）」と改称。江戸期には、世界文化遺産の姫路城の「城下町」を支える海の玄関口、瀬戸内海航路の要衝として栄えた。

1889(明治22)年に「飾磨港」と改められ、1951(昭和26)年に広畑、網干の両港を包含し「姫路港」として重要港湾に指定。1959年に関税法に基づく開港となった。1964年、背後の播磨地域が工業整備特別地域に指定され、1967年には白浜、東部工業、飾磨、広畑、網干、西部工業の5港区からなる特定重要港湾に指定された。2011(平成23)年、港湾法の改正に伴い国際拠点港湾となった。

広畑地区は、戦時中から製鋼工場などの工場立地があり、日本製鉄(現日本製鉄瀬戸内製鉄所広畑地区)による岸壁、防波堤、

航路、泊地などの港湾施設整備が進んだ。現在でも姫路港に民間企業による専有施設が多い理由の一つだ。

その後、姫路港は播磨工業整備特別地域の中核として発展し、鉄鋼、化学、電気・ガスなどさまざまな産業の製造拠点が立地し、大いに賑わっている。また、播磨臨海工業地帯で製造される紙おむつに使用される高吸水性樹脂(日本触媒)、電動パワース



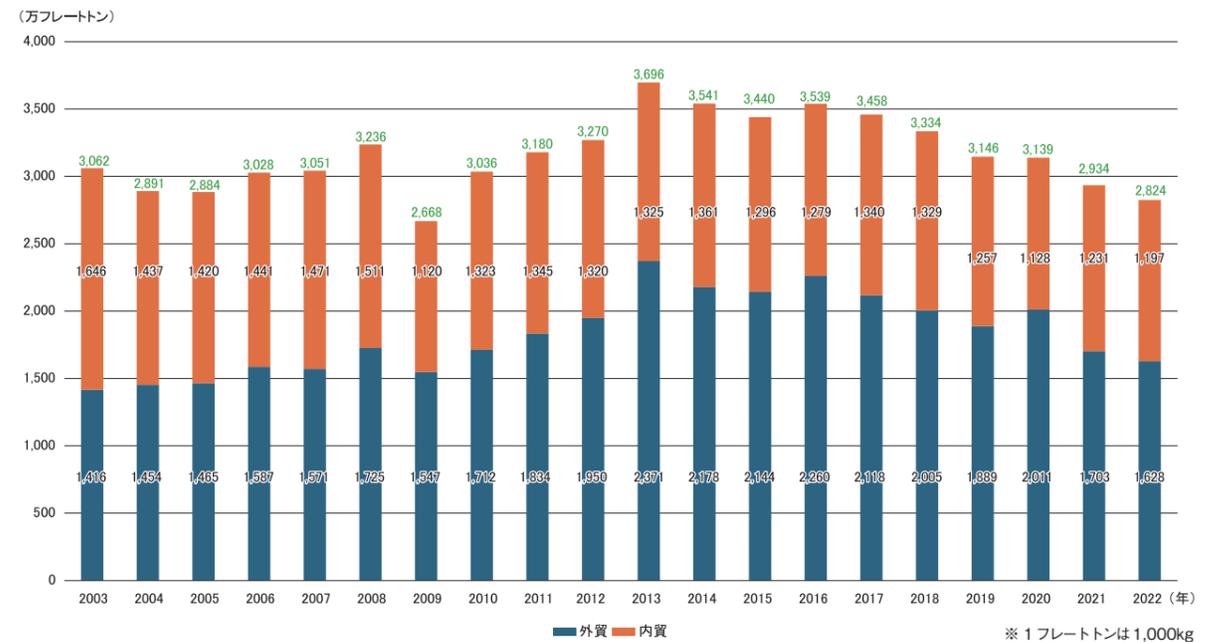
広畑地区で2本目の公共岸壁整備が始まった

テアリングシステム(三菱電機)、光学フィルム用酢酸セルロース(ダイセル)などの製品の基礎素材を製造しており、いずれも世界トップクラスのシェアを占める。このため、姫路港は今後も、さらなる成長へのポテンシャルを持った港湾となっている。

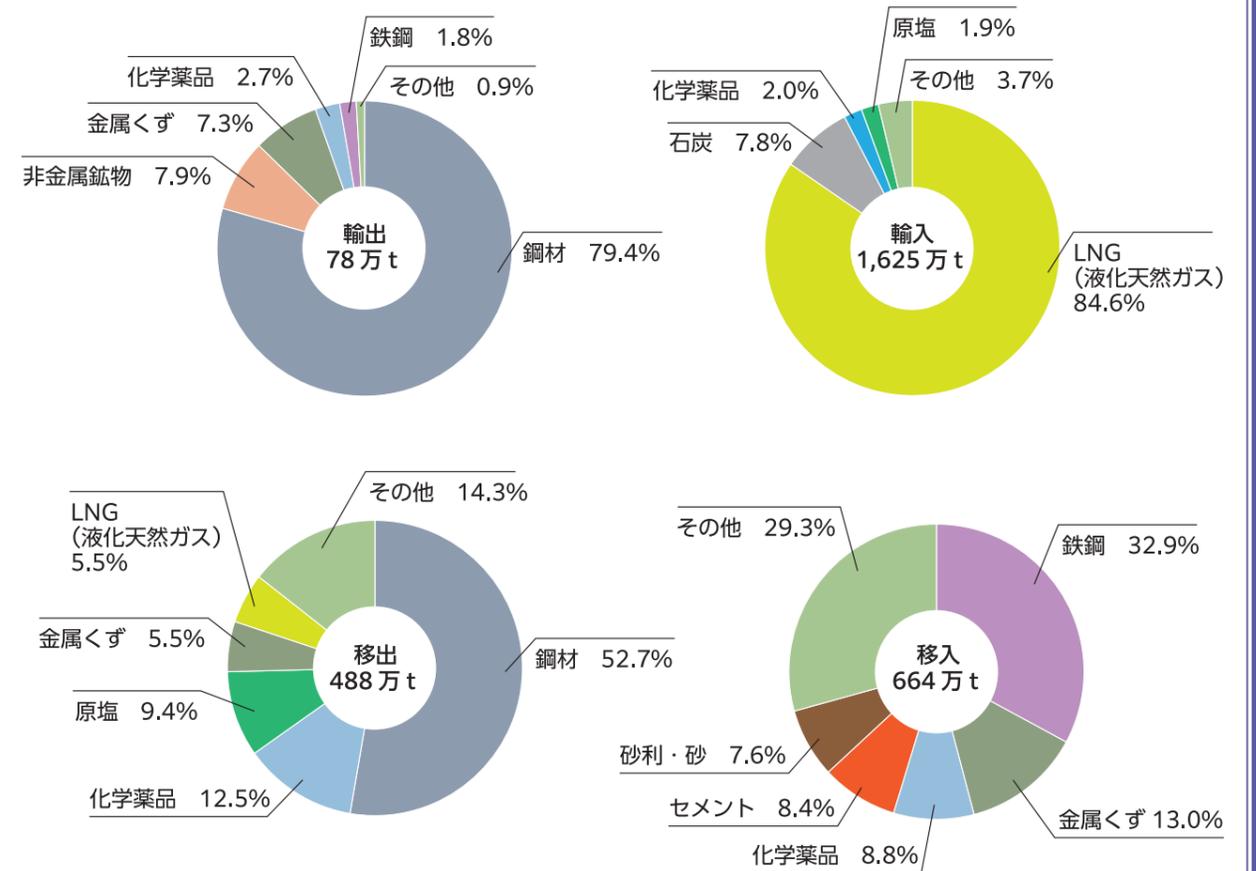
### 世界トップクラスの企業が集積

社会経済情勢の変化に応じて、近年新たなプロジェクトが港内各地で進んでいる。広畑地区では、背後地に立地する企業の需要増を受け、公共岸壁に2バス目を整備する「国際物流ターミナル整備事業」が2021年に新規採択され、2023年7月に起工式を開いて着工した。水深は14m、岸壁延長は240m。埠頭用地5.9haの埋立造成、約8.4haの航路泊地整備などのほか、臨港道路を延伸する。臨港道路は現在、広畑地区までが開通済みで、新たに往復2車線・

### 総取扱貨物量の推移 (2022年)



### 取扱貨物量の内訳 (2021年)



出典:国土交通省港湾局調べ

延長約1.8kmの延伸区間を整備して広畑地区と網干沖地区を結ぶ。広畑・網干沖間にある航路・泊地をまたぐ橋梁は、航行する船舶を考慮して桁下高さ30mとなる見込みで、現在、延伸区間の設計作業中。既設区間(延長1.7km)は往復4車線に拡幅する。

また、臨海エリアにおける工場・物流施設などの将来的な需要増を見越して、浜田地区で新たな埋立事業が始まった。現在、播磨灘で発生する浚渫土砂は網干沖地区にある土砂埋立処分場に投入しているが、2029年頃の埋立竣工が見込まれている。新たな土砂受け入れ場所が必要であり、浜田地区の約23.5haを埋め立てることにした。受け入れ土量は約152万<sup>3</sup>m。今後、埋立護岸を整備していく。

**交流人口拡大、脱炭素実現などの課題と向き合う**

地元の姫路市は、世界文化遺産・姫路城などの観光資源をベースに交流人口の拡大を通じた地域経済の活性化に取り組んでいる。姫路港は瀬戸内海観光の拠点でもあり、同港発祥の地である飾磨地区にある旅客ターミナルエリアには、家島諸島や小豆島を結ぶフェリーなどの定期航路が就航する。兵庫県では、本エリアの再整備に取り組んでおり新たな旅客船ターミナルに旅客機能を集約し、貨物機能とのすみ分けを行う。にぎわいのある拠点づくりを進めるとともに、クルーズ船の誘致等に取り組み、観光客など利用者増を目指す。

脱炭素社会の構築に資するカーボンニュートラルポート(CNP)を目指した取り組みも進む。兵庫県は、「ファースト・ムー

バー『播磨』for瀬戸内・関西」を基本コンセプトに、官民が連携して、播磨地域の面的・効率的な脱炭素化と瀬戸内・関西における水素等のサプライチェーンの拠点形成により、脱炭素化を契機とした産業と経済の好循環を目指している。播磨臨海地域では、年間3,875万t(2013年)の二酸化炭素を排出しており、全国でもトップクラスの排出量となっている。水素に代表される次世代エネルギーへの転換を進めるなどして、2050年までにCO<sub>2</sub>排出量ゼロのカーボンニュートラル実現を目指す。姫路港内に事業の拠点を持つ民間企業がそれぞれ発電燃料をLNGから水素に転換する試みや、低炭素プラントやバイオマス発電所を立ち上げるなど、カーボンニュートラルの実現へ歩み始めている。

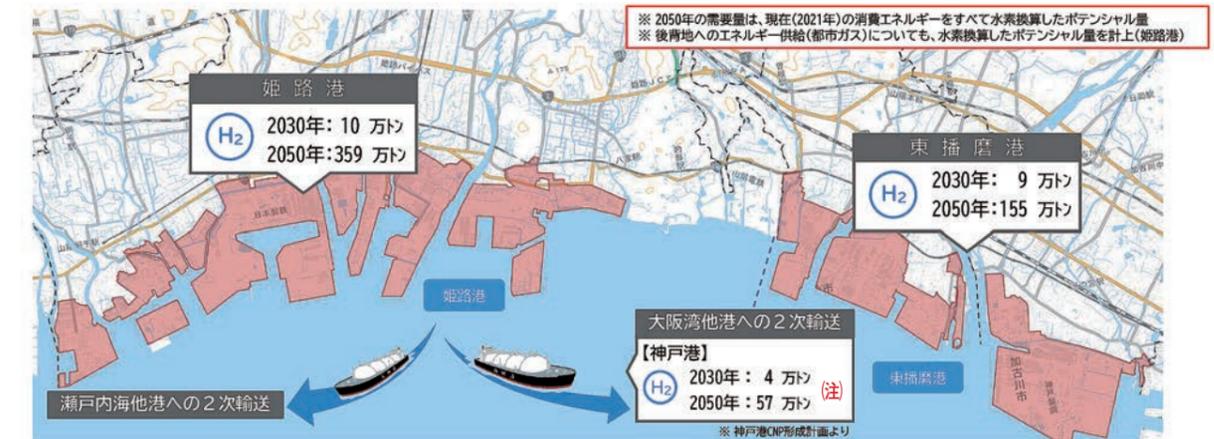


姫路港に初寄港した国際クルーズ客船「ウエステルダム号」

■ 播磨臨海地域のカーボンニュートラルに関する最近の動き

2022年度	2023年度
7月 兵庫県：播磨臨海地域カーボンニュートラルポート推進協議会設置	4月 兵庫県：播磨臨海地域カーボンニュートラルポート形成計画(素案)の公表
8月 関西電力：姫路エリアでの液化水素サプライチェーン構築検討を表明	JR西日本：鉄道アセット活用による水素利活用の検討開始を公表
12月 関西電力・川崎重工業：液化水素サプライチェーンの構築に向けた海上輸送等に関する協業の覚書締結	6月 国：水素基本戦略改定
国：改正港湾法施行(CNP計画の法定化)	9月 三菱重工業：「高砂水素パーク」が本格稼働
	11月 関西電力・JR西日本・パナソニック：姫路エリアを起点とした水素輸送・利活用等に関する協業の基本合意

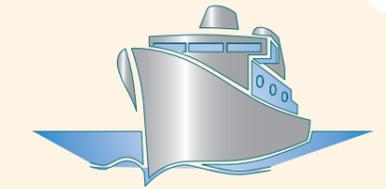
■ 港湾脱炭素化推進計画(素案)



・2030年の水素需要は年間約19万tを見込む  
・2050年の水素換算需要は年間約571万tを見込む  
(注) 2030年の神戸港への2次輸送分は、水素、アンモニアの区分が明確でないため、需要予測に加えていない

Himeji port

PICK UP



国内最大級のバイオマス専焼発電所が稼働開始

2050年のカーボンニュートラル実現にむけて、姫路港内での民間企業の取り組みが活発化している。大阪ガスグループのDaigasガスアンドパワーソリューションと九電みらいエナジーが共同で出資する広畑バイオマス発電所が、姫路港広畑地区に完成し、2023年12月14日商業運転を開始した。バイオマス専焼発電所としては国内最大級となる発電容量「約7.5万kw」と高い発電効率を実現している。

燃料には、輸入木質チップやパームヤシ殻(PKS)のほか、大阪ガス子会社のグリーンパ

ワーフェュエルから調達する国産木質チップを使用する。

Daigasガスグループでは、国産バイオマス燃料の調達を拡大するとともに、発電燃料としての活用を目的とした早生樹の利活用の検討など、国内森林資源の持続可能な利用に取り組む意向を示している。

兵庫県によれば、大阪ガスグループ以外にも、水素等を活用した発電や製品の開発に取り組む企業は相次いでいるという。

(取材協力・資料提供 / 国土交通省近畿地方整備局神戸港湾事務所、兵庫県)